

古代朝鮮語の音韻についての一考察

菅野裕臣

1. 朝鮮語はその資料の貧弱さゆえに朝鮮語史、なかんづく文法はおろか音韻の歴史の分野の研究が遅れている。訓民正音公布後の資料に基づく研究も充分とは言えない。以下に便宜上訓民正音公布後の朝鮮語を中期朝鮮語 (Middle Korean), それ以前の朝鮮語を古代朝鮮語 (Old Korean) と名付けておく¹。中期朝鮮語の研究を充実させた上に、さらに内的再構その他を基に資料の極度に貧しい Old Korean の音韻の様相を明らかにすることが求められている。ここではそのための若干の問題提起を試みる。

2.1. 以下に便宜上朝鮮語の音素あるいは音声は以下のようにほぼ訓民正音に対応してローマ字で示すことにする。特に音声を表す場合には [] の中に示す。

ㅍ ㄴ ㄷ ㄹ ㅂ ㅅ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㄷㅅ ㅌ ㅍ ㅍ ㅍ
g n d r m b β s z ' ŋ j c k t p h ?
ㅏ ㅑ ㅓ ㅕ ㅗ ㅛ ㅜ ㅠ ㅡ ㅟ ㅠ
a ya ə yə o yo u yu ɐ u i

声点 (傍点) はローマ字 (母音) の上の 1 点は去声 (高) を, 2 点は上声 (上昇=低+高) を示す (ただし母音字 i の去声は í で示す)。無点は平声 (低) を表すか, あるいは声調に関して何も示さない。

訓民正音の文字複合は子音も母音も対応のローマ字の複合で示す。

濃音の音声転写は例えば [ʔp], [ʔt], [ʔk] のように示す。

必要に応じて文字の境界を記号「・」で示す。

形態素の境界を「-」で示すことがある。

便宜上音節の頭の子音を「初声」、音節末の子音を「終声」と呼ぶ。

推測し得る形は * で示す。

なお以後語基は次のように表すことにする。I: 第 I 語基, II: 第 II 語基, III: 第 III 語基, IV: 第 IV 語基, V: 第 V 語基。語基については河野六郎 (2013: 38-55), 前間恭作 (1924: 23-24), 菅野裕臣 (1997, 2005a) 参照。

2.2. まず今までの研究の成果は次の点に要約し得る。

- 1) β は語中の初声で初め摩擦音 [β] だったが, ほどなく [w] に変わり, βɐ は o に, βu は u に変わった²。
- 2) 初声の hh は [x] を表したものと思われる。例: hhyə- > kyə- < (火をつける) >。

- 3) z は初声で [ʒ] だったと思われる。-za が現代語の -ya (-こそ) に対応することを参照せよ。但し zyus (現代語 'yuc (サイコロ)) をも参照せよ。
- 4) ? は終声では次の初声を濃音化したものと思われる。? は初声では原則として東国正韻式漢字音にのみ現れるが、知識人以外にはその発音が困難だったであろう³。
- 5) j は初声では [tʃ], [dʒ] だったろうと思われる。Cf. dud·jäb- (お聞きいたす, お伺いする)。d·j は 恐らく [t·s] > [t·tʃ]。d·j は s·j と書かれることがあった。現代平壤方言の発音は [tʃ], [dʒ] を継承する⁴。
- 6) 初声の複合子音 (bs, bsd, bsg, bd, bj, bt など) の b はそのまま発音されたと思われる。例: *möd·bsi > mob·si <とても>, jab·ssër < *ja·bsar <もち米>, mæib·ssar < *mæi·bsër <うるち米>, ham·ggöi < ham·sguúi < ham·bsguúi < *han·bsguúi <共に> 参照。また sn も。例: snahëi < sənahëi <男> 参照。但し sg, sd, sb, ss, sj についてはそれらが 15 世紀に複合子音か濃音だったかが不明である (ss は少なくとも濃音であった可能性がある)。いずれにしてもそれらは後に濃音になったと思われるが、その時期は不明である。
- 7) 終声は b, d, g, m, n, ŋ, r, s は区別されていたと思われる。このうち s については異論もあるが、d~d, d~t; s~s, s~j, s~c (終声 ~ 初声) という綴り字の交替が規則的に起きたことからみて終声 s と d は区別されていたと信ぜられる。ただし s の音価については諸説があり得る。例: göd~gò·dí <所>, bad~ba·tí <畑>; 'ös~'ò·sí <服>, nàs~nà·jí <昼>, bís~bí·cí <光>。また語中における初声の mn は [n·n] であったと思われる。例: da·nnenírà < dan·nenírà <達するのである> cf. dah- <達する>; da·kò < dah·gò。このような形態音素論的交替として次のものもあった。b~b·s, g~g·s, *r~r·s; s~s·g; rb~r·b, rb~r·p, rm~r·m, rg~r·g; ns~n·j, ms~m·c; s~s·d; n~n·h, r~r·h 例: gab~gab·sí <値段>, nag~nag·sí <釣り>, *dol~dor·sí <周年>; 'is~'is·gí <苔>; 'yæðərb~'yæðərbí <八>, 'arb~'ar·pèi <前>, 'örm~'or·mä <移す>, dërg~dër·gí <鶏>; mas~mas·dá <任す>; 'ans~'an·jä <座る>, 'ums~'um·cü- <体を縮める>; än~'än·hí <内>, dūr~dūr·hí <二> 参照^{5,6}。上記のうち s·g, s·d などが濃音であるかどうかは問題となる。また ns~n·j, ms~m·c の s は実際に発音されたかが問題となるが、恐らくは次の子音を濃音化させる符号なのではないかと思われる。以下のものは特殊な形態音素論的交替である。b~β, s~z, d~r。例: dëb~dæβá <暑い>, nīs~ni·zà <忘れる>、

duud-~du·rə <聞く> 参照. 単語内部における初声 ” (00) は次のように発音されたものと思われる. h̄i·”yə [h̄ai·jə] <させて>, m̄i·”i- [m̄ai·i-] <結ぶ>⁷.

8) *v* は [ʌ] と発音されたというのが通説である. 河野六郎 (1979a) のうち「朝鮮方言学試攷」の「第一主題: 音に就いて」参照. 後に第1音節では *a* に, 第2音節以降では *u* に変わったが, その時期は明瞭でない. 河野六郎先生によれば *v* [ʌ] は用言 *he-* <する> では20世紀初頭まで保たれた可能性があるという (前間恭作 (1909) での記述による).

9) *ə* の音価については諸説あるが, 河野六郎先生説 (漢字音による) でははじめ [e] だったのが後に [ə] に変わったという. 河野六郎 (1979b) のうち「朝鮮漢字音の研究」の「結論」部分 (510 ページ) 参照.

10) いわゆる中性母音 *i* もかつては Old Korean の段階で他の母音と同じく陰陽に分かれていたものと思われる (陽 *i*, 陰 *i*). 陽母音扱いされる *i* が随所にあられる. 河野六郎 (1979b) のうち「朝鮮漢字音の研究」の「結論」部分 (511 ページ) 参照.

11) 母音 + *i* は二重母音だったが, 後に単母音化した. その時期は明瞭ではない⁸.

2.3. 中期語の歴史的研究では内的再構を含めて数々の成果があった.

12) 朝鮮語学における1つの大きな成果は「語基」の設定にある. これは河野六郎先生によって提出され, 文法論及び特に声調論 (=アクセント論) で決定的な意義を見出した⁹. 以下に概略の表を示す.

語幹	陰陽	意味	第 I 語基 (∅)	第 II 語基 (ë / ü)	第 III 語基 (ä / ə)	第 IV 語基 (ó / ù)	第 V 語基 (i)
母音語幹	陽	見 庄		bo- bjë-	bo'ä- bjä-	bö- bjö-	-- --
	陰	与 用		ju- bsü-	ju'ə- bsə-	jü- bsü-	-- bsí
r 語幹	陽	知	'är- / 'ä-	ärë-	'ärä-	'ärö-	--
	陰	遠	mär- / mē-	märü-	märə-	märü-	märí
子音	陽	防 良	mag- dyö(h)-	magë- dyöhë-	magä- dyöhä-	magó- dyöhó-	-- dyöhí

語幹	陰	食無	mæg- 'äb-	mægü- 'äbsü-	mægə- 'äbsə-	mægü- 'äbsü-	-- 'äbsí-
----	---	----	--------------	-----------------	-----------------	-----------------	--------------

(第1表)

第III語基は単独で連用形として用いられる。語尾の前でも用いられる。

第V語基は単独で副詞形として用いられる。

他の語基は必ず接尾辞、語尾とともに用いられる。

第I語基と第II語基の選択は接尾辞、語尾の頭音によって決まる。すなわち第I語基は接尾辞、語尾の頭音 g, n, d, s, j の前で、第II語基は接尾辞、語尾の頭音 n, m, r 及び尊敬接尾辞 -sí- の前で用いられる。第II語基はこのようにアルタイ諸語のいわゆる接合母音 (Bindevokal) と似ていると言える。

ある種の語尾は第I語基/第II語基及び第IV語基の後ろで機能を異にする。後者はいわゆる o/u 語幹の機能に関する論争 (李崇寧氏と許雄氏の) に発展したが、いまだに決着していない (第IV語基を volitive 語幹と呼ぶ人もいる)。用言の体言形 (Gerund) は常に IV-m である。第IV語基は後に第II語基に合流して消滅した。

母音語幹は第I語基と第II語基の区別を持たない。

r 語幹は尊敬接尾辞 -sí- に接尾する形 (第II語基) だけは子音語幹的だが、それ以外は母音語幹と同じく第I語基と第II語基の区別を持たない (尊敬接尾辞 -sí- のこの特殊性の理由はいまだに明らかではない。接尾辞 -sí- の特殊性はこれに先行する thematic vowel とともに本来母音で始まるものであった可能性を示唆するが、しかしこれは接尾辞 -zäb-, -dä- には -sí- が接尾する)。

r 語幹の第I-II語基では n, s, d, j の前で (後に尊敬接尾辞 -sí-) の前でも r が脱落した。現代語では d, j の前で r が復活した。

接尾辞も語基を持っている。以下志部昭平 (1986-1987) を引用する (若干菅野が作り替え、「尊敬」と「謙讓」を追加した¹⁰⁾。

	第I語基	第II語基	第III語基	第IV語基
不定	∅	-ë- / -ü-	--	-ö- / -ü-
現在		-në-	--	-nö-
回想		-dä-	--	-dä-
強勢		-gə-	--	-gä- / -goä-
完了		--	-ä- / -ə-	--
尊敬		-sí-		-syä-

謙 讓	子音+	-sëb-	-seβë-	-seβá-	-seβó-
	-d+	-jëb-	-jeβë-	-jeβá-	-jeβó-
	有声音+	-zëb-	-zeβë-	-zeβá-	-zeβó-

(第 2 表)

志部昭平氏も言っているが、これらの接尾辞及び第 III 語基と第 IV 語基が本来の自立語に由来する可能性を排除し得ない(「謙讓」はまさに動詞 sër-b- < 申し上げる > に由来する). -sëb- > -sub-, -zëb- > -b- 参照.

中期語の体言も以上の用言に倣って語尾(あるいは助詞)を以下のように語基に当てはめることが可能である. C: 子音語幹 R: r 語幹 V: 母音語幹

語基に接尾する助辞(助詞)等は以下の表に示されたもののほかに次のものがある.

第 I 語基: 属格 CRV-s, 与格-s·ggài (尊称), 強調 C-gòs/RV-'òs, 配分 C-gòm/RV-'òm, 具格 RV-rò, 比較格 RV-rà'oà, 強調 Rn-zà, 疑問詞疑問 C-gò/RV-'ò, 判断疑問 C-gà/RV-'à

第 II 語基: 属格・位格 CRV-èi /-ùui, 具格 C-èrò /-ùrò, 比較格 C-èrà'oà /-ùrèrà'oà, 題目-n /-nèn /-nùn, 主題-rràn

第 V 語基: 属格 V-i, 繫辞-i-

さらに次のような後置詞的接辞がある.

絶対格+ 比較 dugò, dugòn, 呼格(尊称)-hà, 追加-dò, 程度-màn, 限定-sbün, 制限-sgejãñ, 多数-dèrh, だけ-mädá, 強調-bës, -bòs

位格+, 具格+, 絶対格+ 奪格-syò

対格+, 具格+ 奪格 buté

属格+, 絶対格+ 与格 söndëi

対格+, 絶対格+ 与格 daryò, 与格 dëbüürò

		第 I 語基	第 II 語基	第 III 語基		第 V 語基
		絶対格 -Ø 共格 C+goa RV+'oa	-- C-è- / -ùr- 対格 CRV +r V+rèr/rùr	呼格 C-à /-ò V-'yà /-'yò	位格 C-ài /- èi V- 'yài (i 語幹-ài)	主格 CRV-i
母 音 語	仏	butyò		--	--	butyèi
	牛	syò (『訓蒙字会』)		?	?	syòì
	橋	dëri		--	dëri'yài	dëri

幹	チマ	cima		--	cima'yəi	?
	駕籠	gamá		--	gamá'ái	?
r 語幹	娘	sdër	sdë:rë-	*sdë:râ	*sdë:râi	sdë:rí
	日	nâr	nâ:rë-	--	*nâ:râi	*nâ:rí
子音 語幹	瓢箪	bâg	bâ:gë-	--	bâ:gâi	*bâ:gí
	心	mezem	meze:më-		meze:mâi	meze:mí

(第3表)

<牛> は『訓民正音』(解例本) では syo (平声) で現れる。

体言には第IV語基はない。

体言では r 語幹は子音語幹的である。

体言の第I語基は、用言とは異なり、単独で用いられる。このことが体言語尾を助詞化した一因となったと思われる。

対格 -rër /-rür, 題目 -nèn /-nün はそれぞれ -r 及び -n の延長形である。

- 13) 中期語の異形態を生む音韻論的变化としてまず r の後の g の脱落が挙げられる。例：用言：*’är·gò > ’är·’ò <知って>, 体言：*der·goà > der·’oà <月と>。体言の場合この脱落は後に母音語幹にも及んだ。*syò·goà > so’wa <牛と>。また現代語では r 語幹で用言も体言も先祖返りが進行した：’ar·go, dar·goa。このことは現代語において r 語幹体言が、具格 RV-rò / C-èrò /-ürò の場合を除いて、子音語幹に合流することを促した。

r の後の g の脱落の過程を河野六郎先生は $g > \gamma > \text{fi} > \emptyset$ のように描き、中期語の表記 (r·’) は fi の段階を示すものとした (*’är·gò > [a:l·γo] > [a:l·fio])。r の後の g の脱落を河野六郎先生は「前間氏法則」と呼んでいる(前間恭作(1924: 19)をも参照)。筆者は最後の段階、しかも r と母音の間に hiatus があるものと見たい ([a:l·o])。なお [a:l·fio], [a:l·o] の段階の [l] は [r] であった可能性がある(現代語では [h] の前の r は [r] である)。なぜならば中期語の訓民正音作成者たちは彼らが音素と知覚した音声は文字化したと信ぜられるからである。

- 14) 中期語には第I語基で母音, m, n, r を末音とする体言と用言が第II語基以降で母音, m, n, r の後に(つまり語基形成母音の前で) h を持つものがある。以下の表を参照。

	母音-		m-		n-		r-	
	I	その他	I	その他	I	その他	I	その他
体	国		雌		内		刀	

言	nará	nará·h	'am	'am·h	'an	'an·h	gar	gar·h
用	達する		--		--		病む	
言	da-	da·h					'ar-	'ar·h

(第4表)

このうち haner ~ hane·r, haner ~ haner·h のように2つの形を持つものが15世紀語にはある。

現代語では体言はこのような h を失い (例えば, gó·h <鼻> は現代語では ko となった), 用言は正書法で語幹末音 h を書くことになっている (darh-, 'arh-). 現代語では 'anh- (しない) が生じた. 志部昭平 (1987), 「中期朝鮮語」(3) では体言については「h 曲用」と呼んでいる。

15) さらに中期語には以下のようなタイプの体言と用言が認められる。これについては河野六郎 (1979a) のうち「朝鮮方言学試攷」の「第二主題: Δ音に就いて」と「第三主題: 語間の -g- の消失」を参照せよ。ここでは「k 曲用」という術語が用いられている。いずれにせよ 14) も 15) も方言資料と歴史資料により k と何らかの関係があることが説かれている。志部昭平 (1987), 「中期朝鮮語」(3) では体言については「特殊な交替をする語」と呼び、用言については「混合型」と呼んでいる。河野六郎 (2013; 153) は用言に関して「混合活用」と呼んでいる。

	m		n		r		z	
	体 I 用 I-II	その 他	体 I 用 I-II	その 他	体 I 用 I-II	その 他	体 I 用 I-II	その 他
体	木		他		一日		狐	
言	namo	nam·g	nyənu	nyən·g	here	her·r	'yəzu	'yəz·'
用	植える		--		謂う		曳く	
言	simu-	sim·g			nire-	nir·'	guzu-	guz·'

(第5表)

上記のタイプに属する上記以外の単語を以下に挙げておく。

m: (体言) gumu ~ gum·g <孔>, (用言) simu- は sim- (第I語基) という子音語幹をも持つ。

r: (体言) (1) mere ~ mer·r <宗>

(2) gere ~ ger·' <粉>, nere ~ ner·' <津>, jere ~ jer·' <柄>

(用言) ¹¹ (1) huru- ~ hur·r <流れる>, buru- ~ bur·r <呼ぶ>, nuru- ~

nur·r < 圧す >, muru- ~ mur·r < 退く >,

(2) gore- ~ gor·' < 選ぶ >, dire- ~ dir·' < 破る >, bsdire- ~ bsdir·'
< 破る >, bere- ~ ber·' < 貼る >, buru- ~ bur·' < 増やす >,
dare- ~ dar·' < 異なる >, dyəru- ~ dyər·' < 短い >, sbere- ~
sber·' < 速い >

(3) morè- ~ mör·r < 知らない >

z: (体言) 'aze ~ 'az·' < 弟 >, muzu ~ muz·' < 大根 >

(用言) beze ~ bez·' < 砕く > [15世紀語資料には bes·' という表記も現れる],
bizu- ~ biz·' < 整える > [bi·z も現れる]

16) 中期語では繫辞 -i- (肯定形), 'ani- (否定形) においても語尾の頭音の g が脱落する. この現象を河野六郎先生は自立語 'ir- < 成る > の繫辞化と見る. すなわち語幹末の r が語尾の g を脱落させ, さらに語幹末の r が語尾の d の前で消滅した. さらに r は後にすべての子音の前で消滅し, 母音語幹に転化した. すなわち名詞+動詞 'ir- (あるいは名詞主格形+動詞 'ir-) > 名詞 -i- (否定形は多分否定副詞 'ani+動詞 'ir- > 名詞+'ani-). 次に繫辞語幹 -i- が語尾の頭音 d を r に変えたというものである. この推定は受け入れ可能であるものと思われる. 河野六郎先生はこのような r の脱落を「前間氏法則」と呼んでいる (前間恭作 (1924: 101) をも参照)..

17) 以上は李朝の資料に基づいた考察である. ところで高麗時代の『旧訳仁王経』, 『瑜伽師地論』 (南豊鉉 (1999)) その他の口訣資料が朝鮮国内の重要な朝鮮語資料であることは間違いないのだが, 南豊鉉 (1999 その他) はその主張する解読には程遠いと言わざるを得ない. 筆者は言語資料 (この場合主として接尾辞や助辞, 語尾等) は高麗—李朝という継続性においてとらえられなければならないと考えるが, 高麗語が李朝語と大きく異なる言語でない限り¹², 今までの解読が成功したとは言えないのは, 韓国の言語史研究者が言語史の構築に当たり, 解読したと言われる成果をほとんど利用していないことにも表れている. したがって本稿では高麗の口訣資料には言及しないことにする.

2.4. 中期朝鮮語の声調は河野六郎 (1979a), 許雄 (1965), 金完鎮 (1973) らによって現象面はほとんど明らかにされた. 筆者はさらにそれを整理して中期朝鮮語の声調はアクセント体系であることを明らかにした (菅野裕臣 (1998) 参照). チョムスキー理論に基づく金次均氏による複雑な声調論は全く必要ない. 現代朝鮮語の慶尚道方言の声調=アクセント体系については許雄 (1965),

金次均氏、福井玲氏の研究があり、咸鏡道方言のそれは R. Ramsey (1977) の研究がある。福井玲 (2013) はアクセントを含む朝鮮語の音韻史全般にわたる意欲的な考察をなした。今菅野裕臣 (1998) にならって中期語のアクセントを要約する。

18) 中期朝鮮語は昇り核を 1 つの語幹 (単純語幹=非合成語幹) 中に 1 つ持つ (合成語幹では 2 つ以上持ち得る)、あるいはまったく持ち得ない構造を有する。昇り核を持つモーラの声調 (=アクセント)、すなわち「高いアクセント」を朝鮮の言語学者は「去声」と名付け、それを持たないモーラの声調 (=アクセント) たる「平声」(低いアクセント) 及び「平声+去声=上声」(=上昇調すなわち 2 モーラ [第 2 モーラに昇り核を持つ] からなる音節のアクセント) と対立せしめた。第 2 モーラに昇り核を持つ音節は現代語の長母音に発展した。中期朝鮮語は典型的なモーラ言語である¹³。

19) 中期朝鮮語の語幹以降の部分すなわち接尾辞及び語尾 (体言の助辞あるいは助詞もここに属する) は音韻論的には原則として常に高い (すでに語幹に昇り核があればそのままであり、それがなければ語幹以降の部分の最初のモーラに昇り核が付く)。語幹以降の部分では実際には音声的には「高」と「低」の繰り返しが現れ、金完鎮 (1973) に従えば、「去声不連三」(「高」が 3 つ連なることはない; すなわち多くの場合真ん中の「去=高」は「平=低」となる)、「語末去平交替」(語末の「去=高」は「平=低」となる場合が多い¹⁴) という原則に帰せられる。語幹以降の部分のその他のさまざまな「規則」は菅野裕臣 (1998) によって定式化されたが (菅野裕臣 (1998) はこれを音韻論の分野ではなく音声の分野に属すると見る。従って金完鎮 (1973) の言う「固定的平声」, 「固定的去声」は筆者の見解と異なるものがある)、なおも問題は残る。

20) 中期語における語幹以降の形態素のアクセントについては 19) で述べたように原則としてすべて高である¹⁵。菅野裕臣 (1998) は用言低調子音語幹につく接尾辞は、I-də- を除いて、低であると述べている (なぜ I-də- だけが例外であるか考察が必要である)。例: 'is-nə-ní, 'is-nə-níyə, 'is-gə-düm. また尊敬接尾辞 I-II -sí- / III-IV -syà- の前の用言低調子音語幹の第 II 語基の thematic vowel は低である。例: I bad-, II badə, badə-sí- cf. bad-nə-¹⁶。

21) 菅野裕臣 (1998) は語幹 (第 I 語基) のアクセントの次のような変動を挙げたが、多くはすでに先輩諸氏の言及されたものである。

i) 用言上声語幹のアクセントは変動するものとししないものがある。

		第 I 語基	第 II 語基	第 III 語基
a	得る	'äd-	'ädüü	'ädä
b	問う	müd-	murüü / mürüü	mur-ë
c	知る	'är- / 'ä-		'arä
d	刻む	(ssör- / ssö-)		(ssörë)
参 考	昇る	'ore-		'or'ä
	知らない	morë-		mörrä

(第 6 表)

b は尊敬接尾辞に接尾する場合には第 II 語基のアクセントは第 I 語基のそれを保つ (次の表の第 II 語基 a, 第 II 語基 b の違い参照). d は現代語の例. 用言上声語幹のアクセントの変動の条件は不明である.

I-II morë- III mörrä <知らない> は河野六郎先生も言われるように, 本来否定副詞 möd+動詞 'är- <知る> からなるものだが, mödär- の母音間の d が r に転じ, 母音 ä が弱化して ë となり, 語幹末子音 r が消滅したものである. 筆者はさらに är- (上声) の去声化の可能性があると見る (すなわち mödär- > mörär-. hë-zëb-därä 参照¹⁷⁾). こうして得られた morë- > III mörrä が -rë- 型変格用言に合流するにあたって I-II 'ore- III 'or'ä <昇る> に見るように 'or ~ 'or' の類推により I-II morë- III mörr (すなわちあたかも前者の低+高から後者の上声 [低高] が生じたかのように) が生じたと思われる.

		第 I 語基	第 II 語基 a	第 II 語基 b	例	
子音 語幹	正格	見なす	säm-	samë	sämë	sämësiñdäi
	変 格	尋ねる	müd-	murüü	mürüü	mürüüsiñdäi
		作る	jis-	jizüü	jizüü	jizüüsiñdäi
r 語幹	知る	'är- / 'ä-		'ärë	'ärësiñdäi	

(第 7 表)

- ii) 用言 1 音節低調母音語幹は接尾辞と第 III 語基の thematic vowel の前で高となる.

'o- 'ò-në- III 'oä (<'ò+ä) cf. 'o-gò IV 'ö (<'o+ò) <来る>

- iii) 用言 1 音節低調母音語幹は合成語で他の語幹の前で高となる.

na- <出る> nä-ga- <出て行く> ii) を参照せよ. このことから用言接尾辞と語基の thematic vowel が自立語に由来するものである可能性

が示唆される¹⁷⁾。

iv) 用言 1 音節高調母音語幹はヴォイス接尾辞の前で低となる。この理由は不明である。

sùm- <隠れる> - sum-gí- <隠す>, tè- <乗る> - tei'ò- <乗せる>

v) 諸氏の指摘の通り、一部の体言には語幹のアクセントが変動するものがある。

mòm - 位格 momái <身> ; jègya - 主格 jègyai <自分>

nə - 主格 nǎi - 属格 nǎi <おまえ> ;

jə - 主格 jǎi - 属格 jǎi <わたくし (謙譲)> ;

ná - 対格 nār - 主格 nǎi - 属格 nai <おまえ>。

vi) 1 音節母音語幹用言は中期語では本来アクセントが次のようにほぼ固定的だったと考えられる。

a) a, ə, o, u 語幹 低

b) e, u 語幹 高

c) i 語幹 高あるいは低

b) のうち唯一の例外は he- であるが、これは本来子音語幹 *hey- だったと考えられる。I *hey-, II *heyè, III heyà, IV heyò。I と II とが合流して he- が生じ、さらにここから IV hó¹⁸⁾ が生じた。*hey- は使役形 heyy- (表記 he''y) にも痕跡をとどめている。*hey- > he- は子音語幹の母音語幹化であると言える。なおこの場合さらに ey が二重母音 (例えば I mei-, II mei·'yá / mei·''yá <結ぶ> 等) とどう違うのかが問題となる。gèd-he- > gèd- <如し> をも参照。

但し a) の例外 sgù- <夢を見る> については不明である。

22) 子音語幹用言について正格用言と変格用言とを比較すると次のような表が得られる。

(A)		第 I 語基	第 II 語基	例	参照
正格用言	a	受ける	bad-	badè	badèmyən
	b	食べる	mæg-	məgu	məgúni
	c	洗う	sis-	sisè	sisèmyə
	d	着る	nib-	nibú	nibúmyən
(B)		第 I 語基	第 II 語基	例	参照
変格	a	聞く	duud-	duuru	duurumyən
	b	達する	da(h)-	dahe	dahendèi

用 言	c	注ぐ	buis-	buiʒu	buiʒurssirá	
	d	臥す	nub-	nuβu	nuβuʒmyə	
(C)			第 I 語基	第 II 語基	例	参照
変 格 用 言	a	歩く	gäd-	gärü	gärüʒmyə	'ädüʒmyən
	b	-- ¹⁹				dyöhənijisgä
	c	作る	jīs-	jizü	jizürä	nīsǵänmarèn
	d	暑い	däb-	däβü	däβün	göβer·ssēi

(第 8 表)

(h) は綴りには表れないが、次の平音を激音化させるもの。

(C) 変格用言 c については 'üs- ~ 'uz- / 'us- <笑う> をも参照せよ。'üz-nənijidä の場合の z は n の前で単なる形態音素表記である可能性もあるのだが (つまり実質的に s と同じ), 'üz-βeri <可笑しいだろう> <'üz-be- (動詞語幹 + 接尾辞 -bè- / -bü-)> の場合は終声の有声子音 [z] を認めざるを得ない。cf. nüi'us-bü- <悔やむ気持ちがある> ~ nüi'uc <悔やむ>。なお現代語では 'üs- ~ 'uz- は正格用言となった。また rb 終声の形容詞は中期語では全部変格用言のようだが、現代語では正格用言となったようである。例: 'yärb- <薄い> II 'yärβü- (中期語), II 'yərbu- (現代語)。

ここから変格用言が破裂音 (及び s) の有声摩擦音化であることを再度確認し得る (b > β > w, d > ð > r, s > z > Ø)。同時に語幹末音の h も g の有声摩擦音化 (g > γ > fi > h) に由来するものであり、それも他の変格用言と同列に扱えるものであるとする可能性がある。そうであれば、変格用言は次のように整理し得るが、このことは上声が「低+高」に由来することと符合する。すなわち第 I 語基は基本形の縮約形である。すなわち変格用言とは母音語幹の子音語幹化に他ならない。母音語幹 'isi- (ある, いる) の第 I 語基 'is-, 第 II 語基 'isi- への分化もこれらの変格用言と基本的に同じである。

	低低型		低高型	
	第 I 語基	第 II 語基	第 I 語基	第 II 語基
d 変格	*duudu- >		*gädü- >	
	duud-	duuru	gäd-	gärü
	*dage- >		-- ¹⁹	
	da(h)-	dahe		

s 変格	*busu- >		*jisü- >	
	buis-	buzü	jis-	jizü
b 変格	*nubü- >		*däbü- >	
	nub-	nußü	däb-	däßü

(第9表)

ついでながらアクセントの観点から変格活用と同じタイプのものとして I-II da'v- <尽くす>, I-II dä'u- <加える> がある. 副詞 dä < III *da'a <みんな, すっかり>. 但し副詞 dä (低) <もっと> は dä'u- の語根か?

第9表で例えば低低型と正格用言 (I bad-, II badë, III badä) だけとの違いなら, 双方の第I語基は同じ低の子音語幹だが, 第II語基で thematic vowel が低と高との2種類がある (前者は変格, 後者は正格) のように整理できようが, そうすると低高型 (変格 II gerü) と正格 (II badë) との違いがなくなってしまう.

KANNO Hiroömi (1995) は Ila sirü-r, Iib sîrû-sinî, III sirä <得る> から I *sîd- を推定し, また Iib gere-syädëi, III gerö-dëi から I *ged- <言う> を推定し, これを I ged-nenyö <教える> (翻訳老乞大) と同形とし, gere-ci <教える> もそれからの派生形であろうとした. なお筆者は連体形 ger'oar (曰) [類合, 石峰千字文他], IV ger'odëi, ger'on は語源が不明になった時代の誤記と見る. 'irked- < 'irh-ged- <言う> 参照.

ところで (h) は中期語では体言にも認められる (以下の表参照).

	b	d	g	h	s	
体言	jib 家	göd 所	bäg 瓢箪	na(h)歳	mäs 味	
用言	正格	jib-摘	bad-受	mæg-食	--	bäs-脱
	変格	däb-暑	duud-聞	--	da(h)-達	nīs-継

(第10表)

(h) は明らかに k に遡るものがある. cf. 漢語 (シナ語) からの借用語: zyo(h) <敷布団> <褥, syo(h) <俗人> <俗, jo(h) <粟> <粟. 但し mäk <墨> <墨.

上の表で da(h)- が変格用言として位置することはすでに述べたが, 体言の第I語基では (h) はゼロとなることになる. なお s 変格に対応する体言も存在する. gëz (縁), gëzai (縁に) cf. 現代慶尚道方言 gä, gäse; 現代語 gä'äbsda / gä'i'äbsda <果てしない>, badas·ga (母音語幹) <海辺> 参照.

ここでも第 I 語基では z もゼロとなる。

次の例をも参照せよ。hanər ~ hanər^h (主格 hanərí / hanər^hí) <天>。

na(h) 型の体言は現代語では母音語幹に合流したが、慶尚道方言では hanato < henə(h)-dó (一つも), hana'i < henə(h)-í (一つが) もある。

3.1 上記 2.3. の 14), 15), 22) で見たように, (h), z 及び変格活用が内的再構のための重要な要素として浮かび上がることになる。

終声字 z の音価が s と同じだった可能性は諸氏によって指摘されている。

しかし 22) で言及したように, 'üz-βəri <可笑しいだろう> <'üz-be- (動詞語幹+接尾辞 -bè- / -bü-) の場合は, 接尾辞 -be- が直前の z によって有声化, 摩擦音化したと思われるから, z は有声音だったとしか考えられない²⁰。さらに次の例を参照せよ。gez·'ai <鉄> < ges- ~ gez- <切る> + 動詞から名詞を作る接尾辞 -gai (物)。この場合明らかに z の後で g が摩擦音化し, 後に fi を経て消滅し, そこに hiatus を生ぜしめたと考えられる。ほかに次の例参照: nor·'ai <歌> < nör- <遊ぶ> + -gai, nər·gai ~ nər·'ai <翼> < nər- <飛ぶ>。そうであるならば, 上記 25) 第 5 表の 'yəz·' <狐> (II 'yəz·'üm / 'yəz·'ən), guuz·' <曳く> (III guuz·'ə, IV guuz·'öm / guuz·'üm) も同様であり, むしろ表記 gus·'ə の s が [ʒ] と読まれた可能性の方が強い。

3.2. さらに上記 15) の第 5 表について筆者は次のように考える。

m	体	木	I *namγ > namo	II *namγə > namgən
	用	植える	I-II *simγ > simu	III *simγə > simgə
n	体	他	I *nyəny > nyənu	II *nyənyü > nyəngüür
	用	--	--	--
r	体	一日	I *hery > here	II *heryə > herrən
	用	謂う	I-II *niry > nire	III *niry > nir'ə
z	体	狐	I *'yəzγ > 'yəzu	II *'yəzγü > 'yəz'ün
	用	曳く	I-II guzγ > guzu	III *guzγə > guz'ə

(第 11 表)

この型の用言はアクセントの点では第 8 表の低低型と一致する。ry 型用言はほとんどが現代語の ru 変格用言となるが, 他の型は子音語幹になったものもある (I-II *simγ > I sim-, II simu, III simə)。この型の体言は現代語では多く母音語幹となった。I *namγ > namo に関して言えば, I *namγ > *name > namo ように変化したと思われる。namo は円唇化によって生じた形である。

なお次の形をも参照せよ : gam-ero > gamoro > gamuro <行くので>.

この型の体言と用言に特徴的なことは基本形（体言第 I 語基，用言第 I-II 語基）が母音で終わることである。そうであるならば自己の代償において有声音（m, n, r, z）+ 弱化母音を生ぜしめる軟口蓋音としては，破裂音 g ではなく，摩擦音 γ を想定し得る。鼻音 m, n の後では摩擦音 γ は破裂音 g となり，有声音 r, z の後では用言で次のような変化を経たと思われる²¹。

- i) *r·γ > r·' (hiatus) > r·r (ru 変格用言)
- ii) *z·γ > z·' (hiatus) (消滅) [I-II guzy > guzru > gu'ru]

但し I-II bezye > beze > bez'e III bez'a <壊す> [III bez'a 形もあるところを見ると，s 変格活用用言に合流したのものもあった可能性がある]

3.3. ここで問題となる g, h, *γ と他の音との結合及び分布を見る（第 12 表参照）。*mγ, *nγ は *mg, *ng の位置に，*zγ は *sγ あるいは *sh の位置に来そうに見える。h も *γ も有声音とだけ結合しそうである。しかし Old Korean においては rg, rh, *rγ の三者のなんらかの区別は認めざるを得ないと思われる²²。

前 後	母音	r	m	n	s	z
g	g· ~ ·g	rg· ~ r·g	--	--	s· ~ s·g	--
h	(h)· ~ ·h	r(h)· ~ r·h	m(h)· ~ m·h	n(h)· ~ n·h	--	--
γ	--	rē ~ r·' / r·r	mo ~ m·g muu ~ m·g	nuu ~ n·g	--	ze ~ z·' zru ~ z·'

(第 12 表)

3.4. ヴォイス接尾辞は現代語では -gi-, -gu-, -hi-, -hu-, -i-, -u-, -i·u-, -ri- 等があるが（ほかに正書法では -cu- と書かれるものもあるが，これは j·hu- ととらえてよろしい），それらは本来 -gí-, -gò- / -gù- であった可能性があると思われる。ところで mæg·í- > mæg·gí- <食べさせる>, mæg·hí- > mæg·kí- <食べられる> のように機能によって形が分化したものもあり，Old Korean におけるそれらの原形をどうとらえるべきか綿密な考察が必要である。-gí- はアクセントの点では第 V 語基のようにふるまう。'uz'í- <笑わせる, 笑われる> cf. 'üs- ~ 'üz- <笑う> ; sim·gí- <植えさせる> cf. *simγ; 'ar·'ò- < *'ar·gò-gí- <知らせる> cf. är-.

3.5. KANNO Hiroömi (1995) は『三国遺事』における「得鳥谷云」, 「糸浦今蔚州谷浦也」という記述から「得」=「谷」=「糸」という関係が導かれ, 音を *sir* とすると, すでに **süd-* > *sir* という音の変化を蒙った形が認められることから, 新羅時代に変格活用が完成していたことを推量した.

従来 *geresyädëi*, *gerödëi* から語根 *ger-* <言う> を抽出していたが (劉昌惇 (1964), 한글학회 (1992) 参照), KANNO Hiroömi (1995) は朝鮮語のアクセント論を手掛かりに **ged-* という語根を推定した (上記 22) 参照).

以上は主として形態素と thematic vowel あるいは次の形態素との間で起こる形態音素論的交替の場合を観察したものだが, その他あらゆる場合を考慮に入れる必要がある.

Old Korean における内的再構による魅力的な研究は中期語のそれと併せて福井玲 (2013) によりかなりなされているが, さらなる研究の深化が望まれる.

[注]

- ¹ 言語史の区分は歴史学上の時代区分とは必ずしも一致しない. Middle Korean と Old Korean との差は, 河野六郎先生に倣って, あくまでも訓民正音による資料とそれ以前のものという違いであるから, 前者を「中世朝鮮語」, 後者を「古代朝鮮語」と訳すのは厳密には正しくない.
- ² 恐らく S. E. Martin はこの事実をも踏まえて彼の音韻論において *o* [ʌ], *wo* [o]; *u* [u], *wu* [u] という図式を描いたと思われるが, われわれに必要なことは美しい体系ではなくて, 内的再構によるのであれ, あくまで事実に基づく図式である.
- ³ 15 世紀の資料では用言の II-r 連体形は多く II-rʔ で現れるが, これは次の *b*, *d*, *g*, *j* を濃音化させたものと思われる. この現象は現代語でも同じである. 但し筆者はこの場合の [ʔ] を独立の音素と認めるものではない.
- ⁴ 多くの朝鮮語方言では *d*, *t* の口蓋化は *j* に合流したが (*dy* > *j*), 平安道方言では口蓋化が起きず, 逆に直音化が進行した (*dy* > *d*). 例: *dyəngədyan* > *dəngədan* (平安道方言), *jəngəjan* (多くの方言) <停車場>. 但しその結果北朝鮮では *ja* [tsa] と *jya* [tʃa] とを区別し分けるが, 韓国では両者ともに [tʃa] である.
- ⁵ 現代語では一般に *rb*, *rp*, *rm*, *rg* は終声ではそれぞれ [p], [p], [m], [k] と発音されるといわれるが, どの朝鮮人もこの場合それぞれ [lp], [lp], [lm], [lk] という

発音が可能である（北朝鮮の綴り *marg·suw* [malk·ʔsuw]（マルクス）参照）。従って中期朝鮮語でもこれらは2つの子音で発音されたものと思われる。

- ⁶ 以上のほかに語中では *rp* < **rb-h*, *rk* < **rg-h*, *nc* < **nj-h* があり得る。例：
ber·pí- < **berb-hí-* <踏まれる>, *ber·kí-* < **berg-hí-* <明らかにする>, **anci-* < **anj-hí-* <座らせる>。
- ⁷ このほかに終声+初声の位置での綴り *s·t*, *s·c*, *b·p* 等では終声字は剩余的なものであり得る。例：*nob·puw-myə* = *nop-u-myə* <高くて>。現代語では語中でのすべての激音と濃音はそれらの直前に音素 /d/ を随意的に付加し得るが、この状況はかなり過去に遡り得るかもしれない（なおかつての朝鮮総督府の正書法による綴り、例えば *jos·ta* = *johda*（よい）, *sgas·go* = *ggagg·go*（削って）等参照）。さらに綴りにおける *d·n*, *s·n* 等で終声が鼻音化していないとは、朝鮮語の音声的特徴からして、信じることは出来ない（恐らく *d·n* = *n·n*, *s·n* = *n·n*）。15世紀朝鮮語の終声表記 *nd*, *ns* 等は合成語において第2要素の濃音化を表した可能性が高い。例：*nund·jezè* / *nüns·jezè* <眼球の縁>, *nund-si'ür* <目頭>, *nüns-sär* <眉間の皺>（ここで *nund* と *nüns* の2つの表記に注意せよ）。但し *nüns-mür* <涙> では *s* は単に合成語の境界を示しただけかもしれない。恐らく *nimgumz mär·ssəmí* <王のお言葉が> の終声 *z* も同じで、有声音 *m* の後ろに有声音の *z* を書いただけかもしれない。
- ⁸ 朝鮮司訳院の蒙学書や漢学書における二重母音の表記は朝鮮語における二重母音の単母音化について何らの情報をも与えるものとは思われないと思われる。訳学書の訓民正音による「発音」表記は主として原綴りの訓民正音への移し替えが本質であると思われるからである。菅野裕臣（2005b, 2005c）参照。
- ⁹ 河野六郎先生は *r* 語幹の第1語基のうち *r* のない形をゼロ語基と呼んでおられるが、*r* 語幹の *r* の脱落の問題は語基設定とは別の問題であるから、ゼロ語基は立てる必要はないと考える。現代語のいわゆる *h* 変格用言の第I語基と *n* で始まる語尾の結合では第I語尾は第II語基と同形となる。I *gurəh- gurə-nai* <そうだ>。 *h* 変格用言が *he-* 用言の母音、さらには子音 *h* の脱落に由来する所以である。ホロドローヴィチ（2009: 45）は河野六郎先生の第I語基、第II語基、第III語基をそれぞれ第I語幹、第II語幹、第III語幹と呼んでいる。中期語以前の語基の機能に関する問題は手つかずである。I *sär-* <生きる>, III *särəm* <人>, IV *saròm?* <知ること>; I *mud-* <埋める>, III *mudəm* <墓>, IV *mudùm?* <埋めること>; I *mag-* <防ぐ>, III *magam* <締め切り

> (現代語), IV magóm? <防ぐこと> ; III càzəm <初めて>, I càs <初めての>, *càs~càz? <初めてする?> ; IV 'irhùm <名前>, I *'irh- <名付ける?> 参照。「語基」という概念を否定しようとする韓国の学者は今までそれに成功したことがない。

¹⁰ ほかに「形容詞化」(あるいは感覚) (-bè- / -bù-), 「ヴォイス」(-gi-, -gò- / -gù-) の接尾辞もある。接続の順序から接尾辞はおよそ3種類に分類され得る。

1) 形容詞化, ヴォイス, 2) 謙讓, 尊敬, 3) その他 (テンス・アスペクト)。1) は語彙的, 2), 3) は文法的である。朝鮮語ではヴォイスは文法的というよりは語彙的である。

¹¹ 前間恭作 (1909: 148) はすでに次のように述べている。「本来「ㄹ」に終るものゝ變例は母音同化の例に入るべきものに非らず寧ろ子音に終る語根の一種として解くを穩當とすれども便宜上母音に終るものゝ終に併せ擧ぐ」。本来の子音変化が母音変化化するものとしていわゆるㄹ変格用言以外に, hAj- <する> 用言, γ に終る名詞, h, z に終る名詞があり, 逆に本来の母音活用が子音活用化するものいわゆる変格用言 (子音語幹), 存在詞 'isi- がある。

¹² 菅野裕臣 (1983) での『楞嚴經諺解』の校正部分を見るに, 高麗語の語尾部分の片鱗をうかがわせるものが散見される。高麗語は語彙に関しては中国文献により概ね新羅語を受け継ぐように思われるが, もしも語尾, 接尾辞の類が, 高麗語の口訣のいわゆる「解説」のように著しく李朝語と異なるならば, その理由をも説明しなければならない。

¹³ 現代語のうち慶尚道方言と咸鏡道方言はやはり Trubetzkoy N. S. (1939) によればモーラ言語 Morenzählende Sprache (モーラを数える言語)) であり, 非モーラ言語たる大多数の現代朝鮮語方言から区別される。大多数の現代朝鮮語方言も長母音と短母音の対立の中和が進みつつある。

¹⁴ 菅野裕臣 (1998) は『訓民正音』(解例本) と『訓蒙字会』所載の朝鮮語語彙の声点の次のような違いにより語末去平交替は15世紀語で随意的なものであったとし, それが成宗朝に生じたとする許雄氏と金完鎮氏の意見に反対した。

	蛇	雹	*	鴉	燕	跟	
訓民正音	bá'yam	mùrui	gò'yòm	näzi	jyäbi	bèrcüüg	syo
訓蒙字会	bái'y am	mùrui	gò'yöm	näzi	jyäbi	--	syò

* 「鴉」の「馬へん」を「木へん」に変える

語末去平交替による語末の平声は多く連体修飾語, 連用修飾語に現れる。

- 15 例えば接尾辞 *-ŋi-* (低) (必ず語末から 2 音節めに現れる) を金完鎮 (1973) は「固定的平声」と呼んでいる。 *hə-ŋi-dá* という形を筆者はどう見るべきかいまだに定見を持たない。
- 16 尊敬接尾辞は謙讓接尾辞の第 I 語基に接尾する。これから見るに、朝鮮語は用言語幹の語根 (すなわち=第 I 語基) の複合が行われるところから、尊敬接尾辞が本来自立語であった可能性が高い。すると尊敬接尾辞をめぐるアクセントの特殊性がやはり問題として残る。
- 17 ほかに去声=高に挟まれた平声=低が高くなる現象があると思われる。例：
buuru-zëb-numirá <呼ぶ>, *gürí-zëb-gəntür* <描く> 但し *hə-zëb-dərə* <する>, *bó-zëb-dəmirá* <見る>。これについては菅野裕臣 (1998: 93) 参照。
- 18 高麗の口訣資料の解読のうちほぼ確実と思われるところによれば、この *ho* 形は高麗時代には成立していた可能性がある。
- 19 今のところこのタイプは見つかっていない。 *dyö(h)-* <よい>, *jö(h)-* <清潔だ>, *män(h)* <多い>- はそれぞれ *dyö-hə-*, *jö-hə-*, *män-hə-* のように用言 *hə-* を後続させる合成語だったと思われる。 *I gəd-~II gətè* <如し> < *gəd-hə-* (現代語 *gat-*) の例も参照。現代語の話し言葉でしばしば *III [kat^hɛ]*, *I [kat^huɔda]* <同じ>, *III [kwit^hanɛ]* <煩わしい> が用いられることを参照せよ。
- 20 *'yöz'ò- / 'yös'ò- / 'yösbó-* <伺い見る> で *'yöz'ò- / 'yös'ò-* の *z* と *s* も有声音であると思われる。
- 21 福井玲 (2013: 163) は *namo* <木>, *kumu* <孔>, *'azə* <弟>, *kere* <粉> を **namak*, **kumik*, **azak*, **karak* と再構している。
- 22 例えば中期語 *berg-* <明るい> / *burg-* <赤い> と中期モンゴル語 *ulayān* < **pulaγān* (現代モンゴル語 *улаан / ulaan*) <赤い>, 満洲語 *fulgiyan* <赤い>; 中期語 *dör(h)* <石> と中期モンゴル語 *čilayūn* < **čilayūn* (現代モンゴル語 *чулуу / chuluu*) <石> などの比較は河野六郎先生も一応はしておられたが、アルタイ語族存立の可能性のない今日そこまで言及の必要はなからう。

参考文献

- 菅野裕臣 (1972), 現代朝鮮語慶尚道方言アクセント体系の諸問題, 『アジア・アフリカ語学院紀要』, 第 3 号, 83-96 ページ。
- 菅野裕臣 (1983), 鑄字本楞嚴經諺解の校正部分に関する表, 『朝鮮学報』, 天理: 朝鮮学会, 第 106, 251-287 ページ。

- 菅野裕臣他 (1988), 『コスモス朝和辞典』, 東京: 白水社, 1053 ページ (特に「文法概説」1008-1017 ページ参照).
- 菅野裕臣 (1997), 朝鮮語の語基について, 『日本語と朝鮮語』, 東京: 国立国語研究所, 1-21 ページ.
- 菅野裕臣 (1998), 한국어의 성조체계에 대하여 (中世韓語的聲調體系), 韓國學報, 台北, 第 15 期, 89-96 頁
- 菅野裕臣 (2005a), 朝鮮語の語基について, 『韓国言語文化研究』, 第 20 号, 福岡: 九州大学韓国言語文化研究会, 1-25 ページ.
- 菅野裕臣 (2005b), 朝鮮司訳院の清学書のハングル対音の性格について, 『韓国語学年報』, 第 1 号, 千葉: 神田外語大学韓国語学会, 1-8 ページ.
- 菅野裕臣 (2005c), 司訳院倭学書の朱円について, 『韓国語学年報』, 第 1 号, 千葉: 神田外語大学韓国語学会, 9-19 ページ.
- 河野六郎 (1979a), 『河野六郎著作集』, 第 1 卷, 東京: 平凡社, 597 ページ (特に「朝鮮方言学試攷—「鋏」語考—」, 101-373 ページ, 「古代朝鮮語に於ける母音間のㄷの変化」, 383-390 ページ, 「諺文古文献の声点に就いて」, 497-463).
- 河野六郎 (1979b), 『河野六郎著作集』, 第 2 卷, 東京: 平凡社, 560 ページ (特に「朝鮮漢字音の研究」, 297-519 ページ).
- 河野六郎 (2013), 「動詞形態論・動詞接辞要説 (上)」(遺稿), 『韓国語学年報』, 第 9 号, 千葉: 神田外語大学韓国語学会, 1-198 ページ.
- 河野六郎 (2014), 「動詞形態論・動詞接辞要説 (下)」(遺稿), 『韓国語学年報』, 第 10 号, 千葉: 神田外語大学韓国語学会, 199-399 ページ.
- 志部昭平 (1986-1987), 「中期朝鮮語」(1)-(4), 『基礎ハングル』, 東京: 三修社, 1986 年 12 月号-1987 年 3 月号.
- 志部昭平 (1990), 『諺解三綱行実図研究』, 「本文・校註・翻訳・開題編」508 ページ; 「文脈附 (KWIC) 索引編」589 ページ, 東京: 汲古書院.
- 福井玲 (2013), 『韓国語音韻史の探求』, 東京: 三省堂, 280 ページ.
- ホロドーヴィチ A・A (2009), 「朝鮮語文法概要 (上)」, 『韓国語学年報』, 第 5 号, 千葉: 神田外語大学韓国語学会, 21-140 ページ (菅野裕臣訳).
- 前間恭作 (1909), 『韓語通』3+4+364 ページ (『前間恭作著作集』上巻, 京都: 京都大学国文学会, 1974, 1-374 ページ).
- 前間恭作 (1924), 『龍歌故語箋』145+9 ページ (『前間恭作著作集』下巻, 京都: 京都大学国文学会, 1974, 1-166 ページ).
- 金完鎮 (1973), “中世國語聲調의 研究”, 서울: 一潮閣, 135 페이지.
- 南豊鉉 (1999a), “『瑜伽師地論』釋讀口訣의 研究【附影印】”, 서울: 태학사,

401+98 페이지.

南豊鉉(1999b), “國語史를 위한 口訣研究”, 서울: 太學社, 576 페이지.

南豊鉉(2009), “古代韓國語研究”, 서울: 시간의 물레, 706 페이지.

南豊鉉(2014), “古代韓國語論攷”, 서울: 태학사, 535 페이지.

劉昌惇(1964), “李朝語辭典”, 서울: 延世大學校出版部, 830 페이지.

한글학회(1992), “우리말 큰사전”, 4 옛말과 이두, 서울: 어문각, 4830-5496 페이지.

許雄(1963), “中世國語研究” 서울: 正音社.

許雄(1965), “國語音韻學” 서울: 正音社.

KANNO Hiroömi (1995), On the two points of accentology in the Middle Korean, AKSE 17th conference: Abstracts, Prague, 96-97 pp.

Ramsey, S. Robert (1977), “Accent and Morphology in Korean Dialects”, 서울: 塔出版社, 264 페이지.

Trubetzkoy N. S.(1939), Grundzüge der phonologie, “Travaux du Cercle linguistique de Prague”, VII (日本語訳 (長嶋義郎): N. S. トルベツコイ, 『音韻論の原理』), 東京: 岩波書店, 377 페이지, 1980).